

# 経済・金融 フラッシュ

## 5月マネー統計 ～通貨供給量が急拡大

経済研究部 シニアエコノミスト 上野 剛志

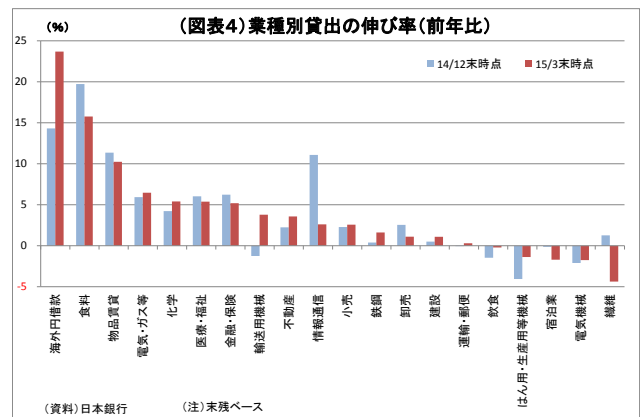
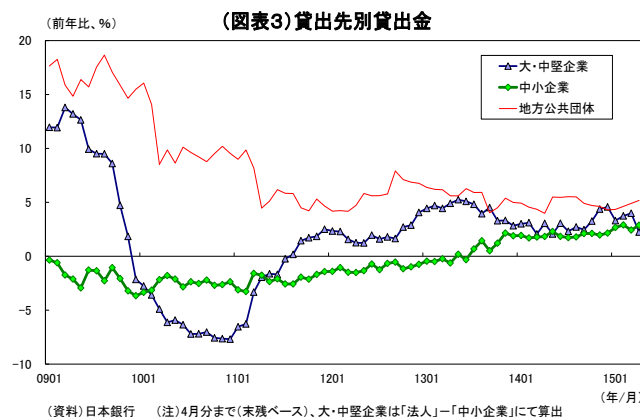
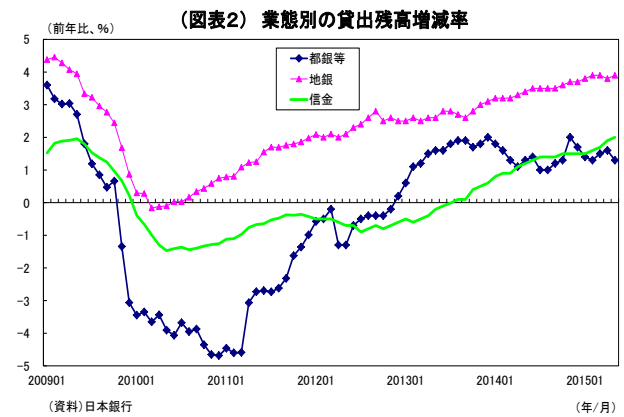
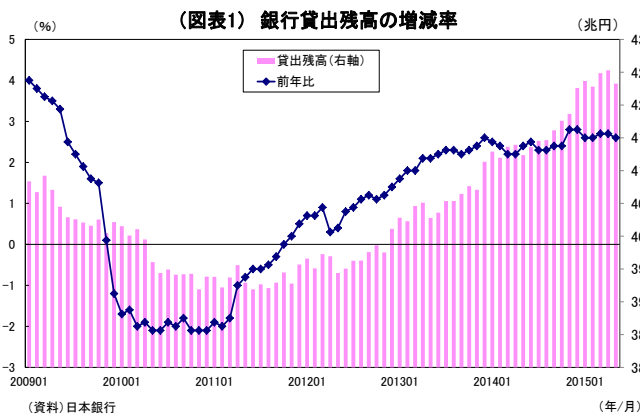
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

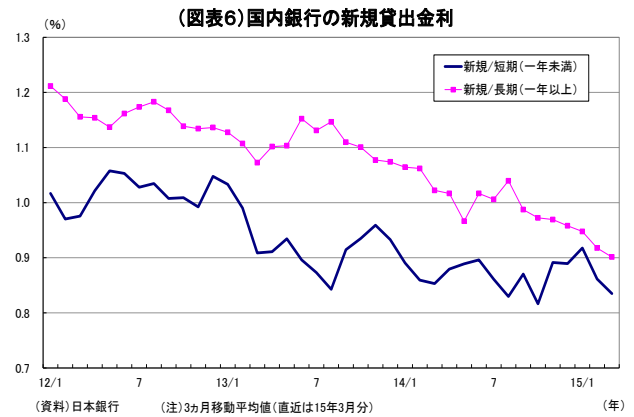
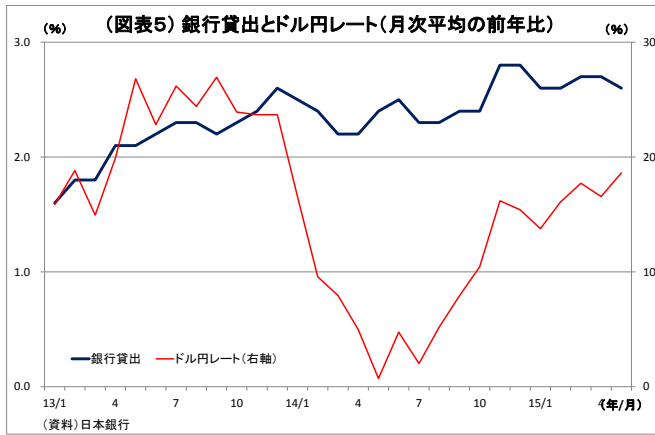
### 1. 貸出動向：伸び率は僅かに縮小

日銀が6月8日に発表した貸出・預金動向(速報)によると、5月の銀行貸出(平均残高)の伸び率は前年比2.6%と前月(2.7%)から僅かに縮小した。

業態別の内訳では、地銀(第2地銀を含む)の伸び率は前年比3.9%(前月は3.8%)と持ち直したが、都銀等の伸びが前年比1.3%(前月は1.6%)と鈍化し、全体の伸び率鈍化に繋がっている(図表1～3)。ただし、前年同月に実行されたM&A資金の反動とのことであり、基調が崩れたわけではなさそうだ。

なお、四半期ベースで公表される業種別貸出状況(3月末時点)を見ると、前年比伸び率の上位には海外円借款、食料、物品貸貸、電器・ガスなどが並ぶ。14年12月末からの変化という面では、海外円借款、輸送用機器の伸び率拡大が目立つが、残高規模が大きい不動産の伸びもやや拡大しており、牽引役になっている。一方、従来牽引役の一つであった情報通信は、3月末にかけて伸び率が大きく鈍化。





全体的にはこれまで遅れていた製造業の伸び率に改善が見られ、円安効果が資金需要の面で一部現れてきた可能性がある(図表4)。

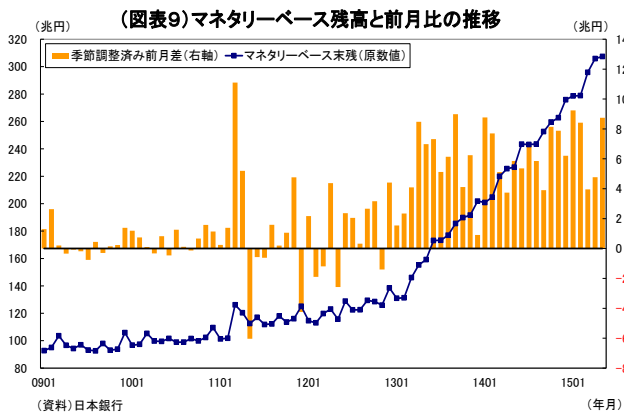
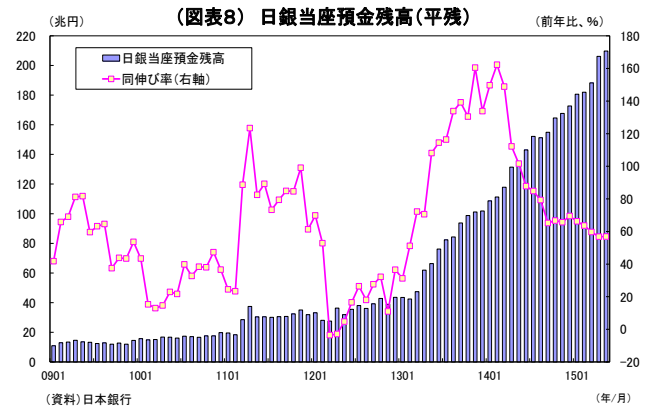
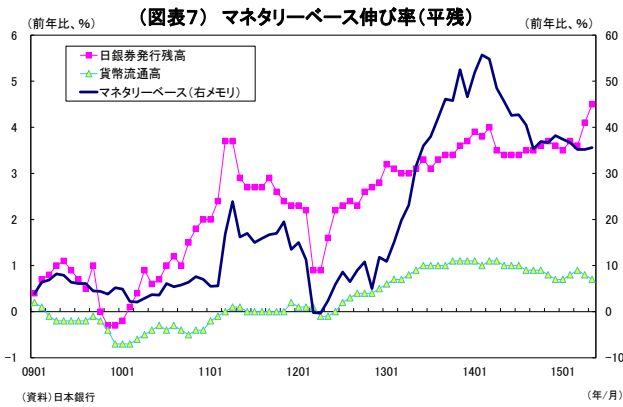
なお、3月の新規貸出金利については、短期(一年未満)は0.944%(前月は0.699%)と前月から持ち直したが、長期(1年以上)は0.826%(前月は0.906%)と低下し、過去最低を更新している。毎月の振れが大きい指標ではあるが、市場金利の低迷や厳しい貸出競争環境、日銀による低利資金供給などが複合的に影響したようだ(図表6)。最近では10年国債利回りなどの長めの金利がやや上昇しているため、新規長期貸出金利にも下げ止まりの傾向が出る可能性がある。

## 2. マネタリーベース：巡航速度での積み上げが進む

6月2日に発表されたマネタリーベースによると、日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示すマネタリーベースの5月平均残高は304.3兆円、前年比で35.6%の増加となった。前年比での伸び率は前月(同35.2%)からやや拡大している。日銀券(紙幣)発行残高の伸び率が前年比4.5%増(前月は4.1%)と高い伸びを示したほか、日銀当座預金の伸び率も同56.9%(前月は56.8%)と前月を若干上回ったためである(図表7~8)。

一方、現行の金融政策におけるマネタリーベース増加ペースは「年間約80兆円増」であり、単純計算では月当たり6.7兆円増が必要になる。5月平均残高の前月差は4.0兆円増とこれを下回り、月末残高ベースでも、月間増加額は1.5兆円に留まる。ただし、5月は季節柄、財政資金の受け払いが受け超になりやすく、国債の発行超も大きいことから日銀当座預金が増加しにくいという事情がある。実際、季節調整済みのマネタリーベース平均残高は前月差8.7兆円増と大きく増加しているため、問題はない。

また、季節調整済みのマネタリーベース平均残高は、1-5月平均で見ると月7.0兆円の増加となっており、これまでのところは金融政策に沿ったペースでの拡大が続いている(図表9)。



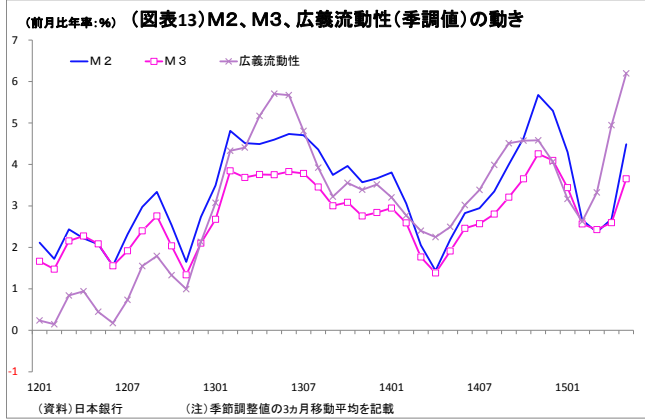
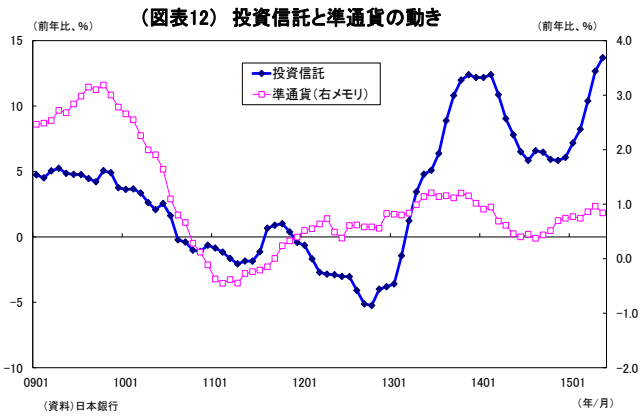
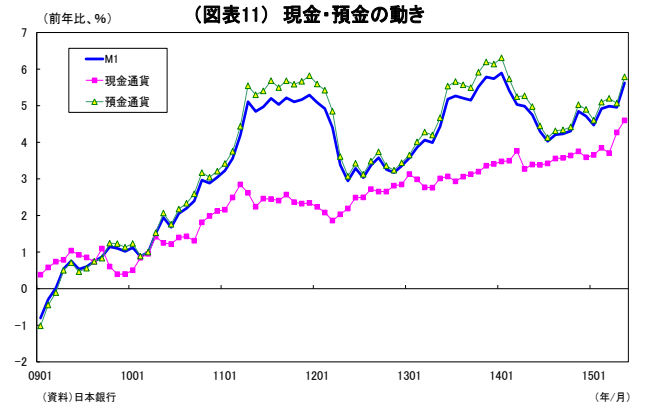
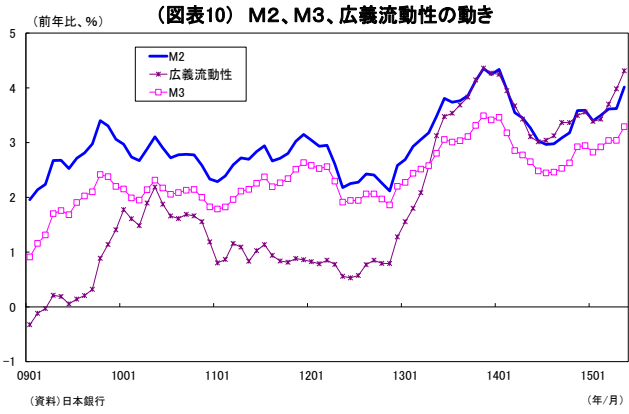
### 3. マネーストック：伸び率が急拡大

日銀が6月9日に発表した5月のマネーストック統計によると、市中に供給された通貨量の代表的指標であるM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高の伸び率は前年比4.0%（前月は3.6%）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同3.3%（前月は3.0%）と、それぞれ前月から大きく拡大した。M3の内訳では、現金通貨の伸び率が4.6%と過去最高を記録したほか、預金通貨（普通預金など）の伸び率も5.8%（前月は5.1%）と大きく伸びを高めた。資金流出要因となる貿易赤字の縮小、予算成立遅れに伴う社会保障費支払いのずれ込み、株価上昇に伴う個人投資家の株式売却などがプラスに働いたとのこと。

M3に投信や外債といったリスク性資産等を含めた広義流動性<sup>1</sup>の伸び率も前年比4.3%（前月改定値は4.0%）と拡大、M3を上回る伸び率を示している。投資信託（元本ベース、12.7%→13.7%）や金銭の信託（6.9%→7.7%）の伸び率拡大が寄与した。

M3や広義流動性などのマネーの前年比伸び率は今回大きく拡大、鈍化傾向が目立っていた季節調整済前月比の伸びも大きく反転している。今回の伸び率は大きく拡大したが、一時的とみられる要因も含まれているだけに、実勢は今後のデータを見極める必要がある（図表10～13）。

<sup>1</sup> 今回、外債および広義流動性について、2003年4月～2015年4月までの計数が遡及改定されている。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。